

## 数理生物学の研究

～研究を通して多くの人と出会える楽しみも・大学院の情報も重要～

第5回卒業 瀬野裕美

(昭和54年卒)

僕は、平成元年に京都大学大学院理学研究科博士後期課程（生物物理学専攻）を終え、翌年、理学博士号を取りました。日本医科大学医学部助手、広島大学理学部（数学科）講師を経て、現在は奈良女子大学理学部（情報科学科）助教授のポストにいます。

僕は高校に入学する頃には理論物理学の研究者になりたいと漠然と思っていました。大学入学後3回生までは物理学を主に勉強しましたが、自分の抱いていた理論科学のイメージが実は応用数学や数理生物学にぴったりくるように感じ、結局、気がつくと、卒業研究からこれまでずっと数理生物学が自分の専門になっています。数理生物学は、生物現象に関する数理モデルを数学や物理学の理論、コンピュータによる数値計算を用いて解析する研究分野です。生物学と数学や物理学などとの学際領域の研究です。研究を通してさまざまな人に会えることが今の僕にとっての最高の楽しみのひとつになっています。ただし、自分のやりたい研究だけをやっていればいいなんていうポストはまずありませんから僕の場合も研究活動や教育活動に加えて、それ以外の仕事にも追われていますが、とにもかくにも研究者として生きてゆくのに一番重要なことは、自分の好きな研究を好きでい続けられるということだと僕は思います。自分の「好き」なことを続けてゆくのは「面白い」や「楽しい」だけでは済みませんから、決して易しくありません。そのためには、自分にとって今面白いことをもっと面白くす

るための努力、さらなる面白さを発見する視野を育てる自主性を保ち続けることが大切です。その必要条件として「考えること」が「好き」でなければならないと思います。

ところで、昨今、大学院進学はかなり身近なものになりつつあります。「大学院進学＝研究者への道」でもありませんし、将来の志望が何であれ、学問の面白さをもう少し身近に感じてみたければ大学院進学をお勧めします。大学院では、専攻よりも自分の勉強したいことに関して指導教官を誰とするか、ということが重要ですから、大学ランキングのようなものは全く無意味です。進学時には大学時代の勉強や経験をもとにして大学院構成教官とその専門の情報を得、いずれかの大学院を選択します。さて、大学の実際の学風は構成教官によって決まります。ですから、本来、大学選択においても同様の情報が必要なはずですが、大学進学の場合にも、大学院の案内を参考にすべきでしょう。実際、大学院の情報ではよりその大学学部の性格が表面化しているはずですが、その性格の中で大学時代4年間を過ごすわけですし、大学選択時にはそうした情報をできる限り集め、分析し、自分の人生の選択について是非真剣に考えてみてもらいたいと思います。大学での4年間は高校までの学生時代の延長では決してありません。自分の人生を左右する選択に正に関わる経験の詰まった4年間です。

---